

『レイテ戦記』論

——いくさ物語表現史（七）——

山下 宏 明

一 いくさ物語と戦記

中世史研究の世界で、武士、もののふの世界が芸能の世界に通じ、もののふは芸人であったと言われる。もののふの世界をさかのぼれば、たしかに宮廷を外界の魔性から守るのがもののふの技であった。たとえば『平家物語』巻四に登場する源頼政が近衛・二条の二代にわたり、主上を「たまぎらせ」た鶴を、得意の弓でおどし退治したという説話などはその具体的な例だと言えるだろう。したがって、その職能は宮廷護衛役の兵衛府や衛門府の役人に帰属するものであった。内裏の雛飾りの壇に、束帯姿で武具を持つ衛士が並ぶわけである。このように、もとはと言えば宮中の護衛役であったもののふの職能が、地方土豪層の間の対立抗争の場での戦闘に参加する、その場に、地方下りの役人が座を占めることにより、やがていわゆる武士階層を生み出してゆく。保元の乱から平治の乱、さらに治承・寿永の源平動乱の時代を経て、もののふたちは宮廷の護衛役から歴史の主役へと変貌を遂げていった。この武士階級が社会を牛耳るの

が、いわゆる中世の時代であり、その武士の子孫を称する徳川政権が、みずからを頂点に、巧みに士・農・工・商の階層の固定化をはかることによって集権政治を実現していった。その統一天下をすっかりそのままスライドさせて天皇親政の王政復古を実現してしまっただのが、明治維新である。いわゆる軍記物語の名称でくくられるジャンルの作品は、いずれも中世の武士の行動を時代転換の主体として位置付けしたものである。それらの多くは『保元物語』とか『大塔物語』などといった「物語」の呼称を有するものであった。

ところが明治以後になると、状況は一変する。守るために、国内に向けてと同時に欧米列国の帝国植民地主義政策に対抗するために、江戸時代までのような四階層のなかの「士」、つまり旧武士階層ばかりに頼っておれなくなる。古くは農民の狩りだしもあったのだが、対外的な富国強兵策をとるために、国民の平等・主権在民をうたうことをたてまえに国民に徴兵の義務を課すことになった。以後主として中国や朝鮮半島などの近隣諸国を舞台に、欧米列国との対決を目標にアジア近隣諸国との紛争をまきおこして侵略を進め、国民は

権利ならぬ義務として外地へと駆り立てられてゆく。ちょうどこの頃、国文学の世界では、中世以来の戦闘の物語を軍記物語とか、軍記物と呼び始める。一方でおそらく近代の外地での戦闘の経過を報道する戦記の用語が行なわれ始めたらしい。もともと歴史学者であった後藤丹治が、この用語を中世の軍記にも利用して「戦記物語」の用語を編み出したが、⁽²⁾どうしたことか、この用語は、その後冷遇され、現在ではもっぱら軍記物語の用語が市民権を得て今日に至る。専攻対象を同じくする若手研究者が集まって研究会を組織する際にも軍記物研究会の名称が使用されたのであった。

この軍記と戦記との間にどのような違いがあるのか。上述したような経過を考えると、もとはと言えば人殺しを芸とした戦闘集団としてのもののふの世界を、とにかく近代国家を名乗るために国民に對し義務化した兵役により狩りだされる民兵の世界が登場する。ここでは戦闘そのものの意味が変わって来るのだろう。こうしたところに戦記の呼称が好まれる状況があったのではないだろうか。しかしそれにしても「軍記」の用語は新しい。『関ヶ原軍記』のように近世初期か、せいぜい『宗像軍記』のように室町末期にまでしかさかのぼれないのではないか。

では職能集団としてのもののふが活躍する中世では、これを何と呼んでいたのか。その一つが世阿弥の作と言われる修羅能『実盛』に見られる「いくさ物語」の語である。加賀の国篠原の古戦場、遊行上人が説法する場にのぞんだ一老人(実は実盛の化身のだが)

が齊藤別当実盛討ち死にの場を語り出そうとして、上人に「それは平家の侍、弓取つての名将、その戦(いくさ)物語は無益、ただおことが名を名のり候へ」と促される。結局、後半、このシテはみずからの「戦物語」を語ることになるのである。そしてこの物語こそ本曲が本説とする『平家物語』であった。それは明確に物語の名称をかかげている。近代の国文学の世界において呼称に揺れは見せながら物語の呼称にこだわったわけでもあろう。一方で『太平記』『承久記』などのように「記」を称するものがあり、この「物語」と「記」とをどのように理解してゆくに、このジャンルの作品評価のあり方がかかっていると一言しても過言ではあるまい。事実、国会図書館などでは、一連の作品を雑史の項に配列した。『平家物語』を主要対象とし、物語の表現構造にこだわり続けるわたくしとしては、この「物語」、それも「いくさ物語」と呼称するのが、このわたくしの思いにかなうわけである。

二 『レイテ戦記』論の課題

わたくしは、この数年、わたくしの言う「いくさ物語」の流れを表現史として考えて来た。その背後には、これらの作品ジャンル、叙事詩が時代を越えて継承され、生き続けるものであり、各作品の表現のあり方から、その流れを探るなかに時代の動きを読みとろうとするものであった。今回、わたくしにとってももともと身近な、太平洋戦争の一激戦地、フィリピンのレイテ島での戦闘をとりあげ

ることによって、いわゆる軍記物語を専攻してきたわたくしとして、この作品をどのように受けとめるかを考えてみようとした。言うまでもなく、大岡昇平という作家の営みとしてとらえる以上、大岡の全作品の中で、この『レイテ戦記』を位置付けることが要求されるのであるが、もとよりわたくしは現代文学の研究者ではない。したがって大岡の作品そのものについても、きわめて視野が限られる。しかし、ただ一つ、軍記物語を手懸けてきた一人として『レイテ戦記』をどのように受けとめるかを考える資格はあるだろう。と言うよりも古典研究にたずさわるわたくしが、ジャンルとしては共通項でくくることのできる現代の作品、しかもその対象とする時代が、まさにわたくし自身の体験とも重なることを考える時、その結果がどのように評価されようとも、『レイテ戦記』へのわたくしの思いを述べておくのが軍記物研究者として当然のつとめであるとさえ考える。一九八一年の秋、アメリカ・カリフォルニア大学のバークレー校に滞在し、イタリア系の某助教授の叙事詩論の講義に参加した時に、古くはギリシャのホーマーから、歴史学者ウイリアム・マンチェスターの太平洋戦争戦記『グッドバイ・ダークネス』までを射程においていたことを思い出す。

大岡の『レイテ戦記』について何が課題であるのか。軍記物語論の常套としては、その作品の成立と作品の主題が課題となる。また作品に改稿の跡がある場合、その改稿の意味が問われることになる。しかし『レイテ戦記』の場合、主題や動機については、大岡自身が

作品内や作品外でも発言して(4)、それを改めて問う必要はない。作品の成立についても、これも大岡自身が素材を明らかにし、作品内でも素材のいずれを取ったかを語っているので問題にならない。そこであえて課題を求めるとすれば、その主題の由って来るところを作品内部に読み取る、その大岡自身の主張がどのように表現されているかということがあるだろう。

以上のことを念頭に、「いくさ物語」を考える一人として作品をとらえる場合、やはり、いわゆる軍記物語とは決定的に異次元の作品であることを思わざるをえない。ただ今の最大の課題として、レイテ島陸戦の最大のヤマバとなったリモン峠での攻防戦に「一五二五高地から迂回し」「南高地東方のリモン川上流に下り」た米軍一九連隊の第二大隊について、

もし私がアメリカ人なら、この二つの迂回部隊の行動について、叙事詩的放浪戦記が書けるのだが、そのため悲惨な死を死ななければならなかった同胞がいるため、それが出来ない。(十三、リモン峠)

としていることがある。つまり大岡は戦記を叙事詩的作品として書けないと言っているのである。大岡は別のところでも、⁽⁶⁾ 現実(6)は物語ではない。戦争に関して事実を伝えるのは、現地で書かれた報告書だけだと言っている。これまで叙事詩論の一環として軍記物語を考察してきたわたくしにとつて、その大岡の発言の意味するところ、いわゆる叙事詩を否定するわけを課題としないわけにゆかない。言い換えれば大

岡はレイテ戦を、なぜ叙事詩的作品として書く気になれなかったのか。それが『レイテ戦記』を叙事詩的な古典としてのいくさ物語とはどのように違った作品たらしめたかを問うことになるだろう。大江健三郎は、現代の戦争の全体をおい尽くそうとする大叙事詩として『レイテ戦記』を見ている。しかも物語としての主人公はなく、唯一の主人公は戦争であるとも言う。

以上を究極の課題として、わたくしは、『レイテ戦記』を以下のよう⁸に読む。

三 戦記であること

大岡は、戦記を叙事詩的世界から切り離して見ている。全体、三十章から構成される。その順序は、各戦闘のあった日次の順に従う、編年態による。しかも、たとえば第一章「第十六師団」において、第十六師団が、米軍の上陸後十日にして崩壊したことからふがいない師団とされながら、実は、その崩壊を早めたものとして、日本軍進駐以来のレイテ島におけるゲリラの活動があったとして、次の第二章においては、年次を越えてゲリラの実態を描く第二章「ゲリラ」を立てるなど、編年の記録の間に、いわば注釈的な章をはさみこむ構成法を採用している。ちなみに別のところでは、ゲリラが多様で、四種類もあったと言う。⁸ 勿論その背景には、フィリピンの置かれた状況と、日・米両国の関与がわざわいしている。ともあれ全体は、わたくし現在の読みでは、さらに八つの段に分けることできる。

すなわち

I ①「第十六師団」 ②「ゲリラ」 ③「マッカーサー」 ④「海軍」 ⑤「陸軍」は、序章にあたる。

II ⑥「上陸」 ⑦「第三十五軍」 ⑧「抵抗」は、レイテ東海岸の攻防。

III ⑨「海戦」 ⑩「神風」 ⑪「カリガラまで」は、栗田艦隊の失敗と転戦。

IV ⑫「第一師団」 ⑬「リモン峠」 ⑭「軍旗」は、リモンへの後退と、その激戦。

V ⑮「第二十六師団」 ⑯「多号作戦」 ⑰「背梁山脈」は、リモンへの日本軍の補給作戦。

VI ⑱「死の谷」 ⑲「和号作戦」 ⑳「ダムラアの戦い」㉑「ブラウエンの戦い」 ㉒「オルモック湾の戦い」 ㉓「オルモックの戦い」は、ブラウエンへの転戦と日本軍の補給基地オルモックの攻防。

VII ㉔「激戦」 ㉕「第六十八師団」 ㉖「転進」 ㉗「敗軍」は、転進という名の撤退。

VIII ㉘「地号作戦」 ㉙「カンギボット」 ㉚「エビローグ」は、西部海岸での惨劇と総括。

である。とくにやまばは④⑤から⑥の一部まで、リモン峠の攻防にあり、それまではその前哨戦ということもできる。この点、当時の第三十五軍参謀長友近美晴が一九九四年十一月一日、一師団長片岡

中将との対話で、⁽⁹⁾

小官（友近）より軍作戦計画の概要を説明せしところ、

「軍の主戦場がカリガラ西南方山地帯になりたるときの計画如何」

と質問があつたが、小官は何の疑義もなく、

「そんなところに戦場が移ろうとは思っていません」

とはつきり答えたぐらゐであつた。

と記し、

期待はづれの第一師団——リモン付近の一師団に関しては詳記するを避けるが、ただ一言、同師団の戦力に関することを記述しよう。

とするのと、大岡の把握のしよは対照的である。当時の大本営は、本土決戦を避けるために、まずフィリピンのルソンでの決戦を考えた。しかし台湾沖航空戦勝利の誤報にまどわされレイテ決戦に切り替える。⁽¹⁰⁾この間、この方面の総括將軍として山下奉文中將は、ルソン決戦を否定できず、栗田艦隊の消滅にあつて、レイテの悲劇へと展開したというのが大岡の全体の構図である。

戦記は、戦闘の経過を逐う。そのため『レイテ戦記』において、戦闘の経過を逐う部分については

I ①レイテ戦の日本軍の主役を演じる第十六師団への進出命令が出た日、昭和十九年（一九四四）四月五日を出発点とする。當時のレイテ島などの状況を②「ゲリラ」に、米軍総司令官マツ

カーサーの方針決定を③「マツカーサー」に、レイテ決戦を決定するまでの状況・経過を④「海軍」に記し、さらに⑤「陸軍」

として、レイテ戦決行までの状況、経過を記すのが序章をなす。

II

米軍のレイテ島東岸上陸からバロ・タクロパンの占領と、これを迎え討とうとする日本軍の敗退を⑥上陸（十月十七日—二十日）、⑧抵抗（十月二十一日—二十五日）に記し、レイテ島の日本の敗軍である第三十五軍の体勢と作戦指導を解説する。

III

栗田艦隊の出撃から米軍のカリガラ進出を記す⑨「海戦」（十月二十四日—二十六日）と⑩「カリガラまで」（十月二十六日—十一月二日）を記し、その間、窮して注ぎ込むことになる神風特攻隊のなりたちを記す⑩「神風」は、日本艦隊の失敗と米軍の転戦である。

IV

第一師団参戦の経過を説明してレイテ決戦の主戦場になるリモン峠の攻防を⑬「リモン峠」（十一月三日—十日）と第一連隊の参加を⑭「軍旗」に記す。

V

⑮第二十六師団、⑯多号作戦、⑰脊梁山脈は、リモン戦を継続するためにとつた日本軍の補給作戦を描くものである。

VI

リモン峠での死闘を⑱「死の谷」（十一月十六日—十二月七日）に記録しつつ、その劣勢を挽回するために米軍の基地をたたくこと、ブランエンへの転戦を記し、その期待はずれから日本軍の根拠地としてのオルモックの死守を考える西岸ダムラアンへの備えを⑳「ダムラアンの戦い」（十一月二十三日—十二月七

日)、②「ブラウエンの戦い」(十二月六日―七日)、②「オルモック湾の戦い」(十二月八日―十五日)に記す。①の「和号作戦」は、ブラウエン攻めを策した大本営の思いが、いかに見当はずれものであったかを説くものである。

VII オルモックの奪回を狙う日本軍の失敗から「転進」という名の敗退を②「壊滅」(十二月十三日―十八日)、②「第六十八旅団」(十二月七日―二十一日)、②「転進」(十二月十二日―二十一日)にたどる。

VIII レイテ島からの撤退を②「地号作戦」(昭和二十年一月一日―十日)、②「カンギポット」(一月二十一日―四月十八日)に記してレイテ戦の惨劇を③「エピローグ」に総括する。

以上見るように、戦記にふさわしく日本軍の迎撃と撤退の経過を日時を逐って記しつつ、その間に日米両軍のその転戦がいかなる状況で、いかなる意味をもって行なわれたかを解説し論述している。戦闘の記録であるとともに、その意味を問う批評にもなっているわけである。その批評こそが、この詳細な戦記を保障していることを銘記したい。

四 戦記としての構成

上述したように、大岡は『戦記』が叙事詩であることを拒否した。しかしながら、例えばピークとなるリモン峠の攻防をめぐる②「第一師団」では、前章①「カリガラまで」十一月二日、第一騎兵団諸

隊のカリガラ入りから、同三日、米軍第一大隊の日本軍との戦闘を描きながら、時間的には、さかのぼって十一月一日、第一師団がオルモックに上陸したことを記し、ここで東京を基地とする第一師団のなりたちから昭和十一年(一九三六)の二・二六事件に参画し、後日満州へ送られて対ソ連戦闘訓練に励んでいたことを語る。この種の手法、ある場面の主役のなりたちを語るのには、実は軍記物語の常套的な方法である。それにこの十一章から十二章へのわたしの部分に、

この日も朝から雨だった。以来五〇日、ここから西方五キロ、ピナモポアンへかけてのカリガラ湾の砂浜、道まで迫った山と叢林、マナガスナス部落から左折し、三キロ上った標高二〇〇メートルのリモン峠の頂上をめぐる、日米両軍の泥と血にまみれた戦いが始まる。(十一、カリガラまで)

と結ぶのは、次章「第一師団」以後のリモンの攻防戦を予告する先説法によるものである。軍記物語でも、時にこの方法が見られるが、そこには作者や編者の主張があらわれるもので、この『レイテ戦記』の場合、これから明らかにするように、作者大岡の主張が、この方法をとらせているものと言える。単なる戦記の羅列ではない。章のつなぎそのものに大岡の主張が込められているのである。

大岡が『レイテ戦記』を書くのに種々記録や体験者の手記を利用して、利用した資料を網羅的に書誌として掲げているところにも明らかである。この典拠の事実は軍記物語にも類

例の見えるところである。しかし作品を対象化する方法として、その出典を調査するという軍記物語研究の常道の方法は、この際、成り立たない。出典を作者が明示することで、いわゆる軍記物語の域を越えてレイテ戦の戦史をなし、また戦争論たりえているわけである。例えば第十八章「死の谷」昭和十九年(一九四四)十一月二十日、原口山での日米両軍の対決に、

夜通し、日本軍の迫撃砲弾が陣地に落ちたので、米兵は壕を掘るひまがなく、泥の中に伏せているだけだった。この日、本道高地と原口山の間、ナガ川の河原に夜営した米兵士の一人が鰐にさらわれた、と『昨日の子供達』は伝える。レイテ島の日米両軍で鰐にさらわれた唯一の記録であるが、フィリピンには人間をくわえこむような大きな鰐はいない。熱帯に対する西欧人の恐怖の表現で、実際は戦線離脱だったろう。(十八、死の谷)と記す。この『昨日の子供達』は、米第二十四師団の戦闘の詳報的なJ・ワアルテインの戦記で、大岡が、日本軍側の資料にとどまらず米軍側の記録や手記をも利用しフィリピンの地誌にも目を及ぼしていることが明らかである。しかも一方でアメリカ側の手記をも異化している。それは日本側の資料についても、

『第一師団レイテ戦記』はこの日(十八日)勝山高地を失ったとしているが、米第三大隊は二十日に攻略したとしている。この喰い違いは日米両軍の頂上奪取の観念の相違によるものであろう。つまり日本軍は十八日に撤収したのを喪失と見なしたの

であるが、米軍は安全に居据わっていられる状況になるまでは、登らなかつたのである。(死の谷)

と言う。そもそも完全に客観的な記録はありえないだろう。それを記録する人の観念によるものである。しばしば史料に、事実を探る客観性を見てきたこれまでの軍記物語研究にとって反省すべきところであろう。

十一月四日の四十九聯隊の奇襲作戦の積極的戦果を評価し、その戦利品などの処理を行なったことを言って、

こういうほかの聯隊の戦記には書かない事実を記載するところに、甲州人独特の現実感覚があるといえよう。(十八、死の谷)と言う。

第一師団のリモンでの戦闘の経過を詳細にたどるが、それは後日友近美晴参謀長が記した『軍参謀長の手記―比島敗戦の真相』が、¹⁾一D(第一師団)は東京駐屯、満州移駐後、支那事変間においても、一度も戦闘の経験なく皇軍決戦師団として最優良装備をもつて居り、大なる期待をもつて送られ来たものであるが、来てみれば将兵の近代戦に対する戦訓の実行は不十分で兵隊は勇敢なるも幹部の指揮力期待程でもなかった。

と記すのを大岡は

これがどんなに不当な誹謗であるかは、これまで書いたリモン峠の戦闘の実状が、十分示していると思われる。(同前)

とするように、実際には十分に戦った第一師団兵士の戦いを証言す

るところに大岡の意図がある。

五 資料批判による軍批判

このような資料批判は、大岡という作家が幅広い諸資料の中に日本軍の動きを逐うことで可能であった。つまり個々の記録を書き残した著者の観念を異化する大岡という作家がある。

レイテ戦の初期、タクロバン・ドラグの戦鬪を九月十九日、ルソン島からの三十三聯隊主力のオルモック到着をもって牧野中将の日記は「終わっているので、爾後の状況の詳細は知り得ない」。にもかかわらず「米側の記録は、九月中にゲリラがアプヨグの日本軍を奇襲し、一個中隊を全滅させた」。「九月末日までに三〇七回日本軍と交戦し、戦死三、八六九名、戦傷四八五、俘虜五五の戦果を挙げたと称する。自隊の損害は戦死三六、戦傷四、俘虜二二である」と。これは笑うべき天文学的誇張である」と、米軍側資料の弱点を見抜き、むしろ牧野師団の「優秀な米軍の兵器をもつゲリラと不断の交戦状況に入っていた」ことを評価するのである。勝ち戦の側の米軍にもこのような身勝手な誇張のあることを言う。(二、ゲリラ)

しかし日本軍自体に関する批評も厳しい。第四章「海軍」で昭和十九年(一九四四)十月十日から十四日にかけての台湾沖航空戦について、大本営海軍部はその戦果を

我部隊は十月十二日以降、連日連夜台湾及びルソン東方海面の敵機動部隊を猛攻し、その過半の兵力を壊滅して、これを潰走

せしめたり。(海軍)

とし、空母十一、戦艦二、巡洋艦三、巡洋もしくは駆逐艦一を轟撃沈、空母八、戦艦二、巡洋艦四、巡洋もしくは駆逐艦一、艦種不祥十三を撃破などの数値をあげて報道した。⁽¹²⁾これを大岡は、

もしこれが事実とすれば、世界海戦史上最大の戦果で、アメリカが開戦以来進めて来た空母大量建造は……一度で壊滅したことになる。(同前)

と言う。事実は「多くの未熟練のパイロットが見た幻影」に過ぎず、重巡一、軽巡一の大破、空母一、駆逐艦二の小破だったと言う。このあまりにも希望的に過ぎる誇張が、この後の日本軍の作戦を狂わせてしまうことになるのである。台湾沖の空戦の真相を知らぬ日本軍はレイテ上陸を企図する米軍を「一個師団ぐらいだろう」と思った⁽¹³⁾。そしてこれを迎え撃つのに水際一部抵抗主義をとることになるのだが、大岡は「この水際一部抵抗主義ほど、無益な損傷と悲惨な壊滅を招いた過誤はない」とし、しかも軍参謀長友近少将は、戦後捕虜収容所で書いた回想録に、

現にレイテであれだけの艦隊が二日間艦砲射撃をやったが、吾々の頭を感じた事は、サイパンの戦訓を聞いていた印象と遙かに違い、あれ位の艦砲射撃で上陸したのかと思わしめた位である。実際は中掩蓋程度に出来ていた工事は大部分破壊せられ、

水際に配置していた大砲の大部分は毀されたが、しかも尚お、反対斜面の陣地とか洞窟陣地とかは立派に残っていて、守兵も

案外損害少なく……米歩兵等の上陸後も、かなりの抵抗が出来たのである。(七、第三十五軍)

と書きつける。大岡はこれを受けて、

いち早く砲と精兵を消耗してしまつた十六師団の将兵が、どういふふうに「かなりの抵抗」をしたか、……を知るためには、

戦闘の実状を見なければならぬ。(同前)

と第七章をしめくくって、次章「抵抗」にその経過の実状を逐うことになる。友近少将の甘い判断を突くために戦闘の経過を戦記として記すのが大岡という批評家である。

大岡によれば、この甘い友近のような判断のうらに、上述の台湾沖航空戦の場合のような初歩的な誤認がある一方、レイテ戦の後半敵の空軍基地であると錯覚した大本営は、リモンの劣勢を挽回するために、もと日本軍が使っていたブラウエン地区の奪回を志して空挺隊を派遣するのだが、現実にはこれらの飛行場は水はけが悪くて使ひものならず、「放棄されたばかりであつた」。

中途半端な日本式のものではなく「完全なアメリカのシステムによる飛行場を（はるかに北方の）タナウアン海岸に建造中だったが、日本軍はそれを知らなかった」と言う。情報の不足から主力のいない基地を主力と判断して無駄な攻撃をしかけたことになる。

それにマグダバ地区に進出の米軍を、「これが米作戦部隊であるということ」を認識しようとせず、「米軍はこういう積極的な戦法に出ない」という蔑視観念と、希望的観測が手伝って、斥候あるいはゲリ

ラとみなすあやまちを犯す。結果的に日本軍の「彼等の中から生き残つた者は一人もいない」。しかもその結果を「以上はみな米側の記録である」とことわる。日本軍のうかつさと、その結果をも米側の資料から探ることによって二重の意味での日本軍のうかつさをあぶり出すことになっている。

昭和十九年（一九四四）十月二十四日から二十六日にかけてレイテ島を中心に日米海軍の最後の決戦が行なわれるが、日本海軍は艦船の八割をあげて出撃し、

大本営は海戦の経過のうちに出現した航空特攻に望みをかけた。敵がわが抵抗に手を焼いて、戦争を止そうといひ出すかも知れないという希望を、終戦ぎりぎりまで持ち続けた。(九、海戦)これが「われわれの精神の典型表現であつた」と言う。

このように日本軍の敗退は、あらゆる局面にその原因が見られるのだが、それを「常に敵の海上補給によって敗けたと理由づけする地上部隊」の類型的な思考があり、この思考類型は現在までつづいているものであろう。類型と言えば、「聯隊の士気と団結の中心」となる「天皇から賜る」軍旗があるが、その「軍旗は大抵総だけになっている」。それをわれわれ日本人の理解としては「最前線に出て砲火を浴びるため」と「考えられているが、反対である。平時は聯隊の軍旗室の奥深くしまっておく。大事にしすぎるから、中央の布の部分」が朽ちて、周囲の縁だけになってしまふのである」と実状を記している。満州の公主嶺の教導学校で養成された六十八旅団に対して六

月二十五日動員令が下る。聯隊長沖大佐が東京へ飛んで聯隊旗を受領して来るが

兵隊はあまり関心がなかったといわれる。最新式の装備を持つと共に、聯隊旗に対する物神的畏敬の念も失われたのである。

(二十五、第六十八旅団)

と言う。類型的思考を内部からくす現実があったと言うのである。日本軍の実態は、例えばリモン峠の攻防をめぐって

大正期に養成された調和型将校は、支那事変以来粗製濫造された大言壮語型将校に引きずられる傾向があった。内地においては政治的下剋上として現われ、前線では作戦的独断となつて、部下を無駄死させた。(十八、死の谷)

と言うが、これも日本の現実であろう。情報不足からする甘い判断、そこへ調和型指揮官の優柔不断と大言壮語の跳ね上がりによる無謀な決定が、多くの無駄死を招いたとするのである。これも現実の日本に見られるところである。

タクロバン方面の戦闘で、一個小隊の日本兵の頑固な抵抗が続く。この状況を米軍視点で記すが、「意外にも日本軍陣地に白旗が挙がった」。米軍は重機を前進させながら日本軍に武器の放棄を促す。「二、三の小銃、剣、飯盒が投げ出された。しかしその次に弾が来て、五人の米兵が傷ついた」。明らかに「日本兵の白旗による欺瞞」である。「敵を斃すためには手段を選ばず」という考え方が浸透していたことを大岡は知っている。

白旗は戦闘放棄の意思表示であり、これは戦争以前の問題である。こうでもしなければ反撃の機会が得られない状態に追い詰められた日本兵の心事を想えば胸がつまる。射ったところでどうせ生きる見込みはない。殺されるまでに一矢を報いようという闘志は尊重すべきである。しかしどんな事態になつても、人間にはしてはならないことがなければならぬ。(八、抵抗)

にもかかわらず、今日でもこの兵士たちの行動を「うまくやりよつたな」と同感するむきがあり、大岡を啞然とさせる。相手の物量を卑怯と見ることは追い詰められた者の思考として理解できるが、だからと言って「なにをしてもかまわない」とは言えない。

相手もわれわれと同じく徴募された市民である。同じ市民同士の間には、戦争以前の、人間としての良心の問題があると私は考える。(同前)

と大岡は言う。はかないブラウエン奪回作戦に使われたバラシュート隊が「一部は平服を着ていたという」。国際法に反する逸脱で、ドイツ軍が反撃作戦に米軍の制服を着た便衣隊を降下させた違反と見合っていると言う。追い詰められた日本軍の退廃は、敗走の過程で、背負い袋に米をつめて運ぶ輜重兵が米の提供を拒んだため「裸にされ帯革で手を立木に縛りつけられ、首を絞めて殺されているのを見た」と言う伊藤上等兵の証言を引用している。亀井秀雄は、この伊藤上等兵を視点人物と見ている。大岡の『野火』に描かれる人肉食いの惨劇が起きるのも自然である。戦死した兵の死体をかならず取

容して埋葬するのが米軍の常であった。それは兵士への畏敬の念であるとともに、「部隊の存在を秘匿しなければならなかった」という作戦上の問題でもあったのである。

米軍の戦死体取容は味方に関する限りほぼ完全で、米兵の死体を見た日本兵は少ない。ブラウエン、ルビ方面の一〇一空挺師団の兵士とこの黒人兵が、私の知るただ二つの例である。(二十、九、ガンギボット)

と大岡自身が一人称でその体験を記している。おそらく死体処理に注目する大岡が日米両方の資料の中に、その問題を探った結果が、この言説になったのであろう。しかるに、これが日本軍の場合は、たとえば西海岸を志して敗走する日本軍が、

山中到る所に白骨化した日本兵の死体があった。(日本兵はそれを通路であることを示す道標として進んだという。(二十七、敗軍)

と記す。死体の処理をめぐる前の米軍の場合とまったく逆の対応のし方が日米両軍の置かれた状況の違いを示すとともに、日本軍の退廃をも物語っているとするのであろう。

リモンの攻防に惨敗を喫した理由について、砲兵の動きが近代の地上戦の勝敗を決定することが、「遡れば一五世紀にシャルル八世」の「時からの常識」である。日本軍の体験したところである。

ノモンハンで重砲と戦車の威力を十分知ったにも拘らず、体質改善をはからなかった陸軍首脳部の怠慢が、リモン峠の勝敗を

決定したといってもよい。(十八、死の谷)

と言う。末期、バロンボンにて米軍の三〇六連隊の一部が、それとは知らずに日本軍の軍司令部に連絡してこれを襲うことになる。

司令部はたちまち混乱に陥り、軍司令官はじめ幕僚は身をもつて逃れた。(二十六、転進)

その様子を土居参謀は「軍司令部の敵襲を受けた時の無統制振りを十二分に拝見す」と苦しげに書いたとし、大岡は

一軍の司令部が、このように敵歩兵の急襲を受けるといことは、めったに起ることではない(恐らく太平洋戦線で唯一の例であろう)。米軍でもまさか軍司令部を奇襲したとは思わなかつたらしく、その記録には載っていない。(同前)

その日米両軍の記録のずれに、

それほどレイテの戦局が破滅的段階に達していたということだ。と言う。昭和二十年(一九四五)の一月、東京の天皇はすでにレイテ戦の断念を発言していたにもかかわらず総理にはそれと知らされていない。時の首相小磯はレイテ島ならぬフィリピン全体が天王山だと考える。しかし現実には上述のような司令部に兵を統率する力もはやなく、兵の「遊兵」化を促すことになっていた。そのみか百二師団長の福栄中将は、あえて統率違反を侵しつつセブ島へ脱出をはかり、それを実行してしまう。しかも中将は、レイテ戦はもう山が見えた。ここで軍司令部と心中するより、早く警備地に帰ってパナイ、ネグロスの資源地帯を確保するのが、結局三十五軍のため

になる。(二十八、地号作戦)と一応のすじは通しながら、その実「命惜しさが先ずある」ことを大岡は見抜いている。

このような日本軍の壊滅の原因として

帝国海軍はやたらに戦闘艦の建造と乗員養成に熱心で、近代戦遂行に必要な転送と護衛に気入れなかったのが、西南太平洋全域にわたる戦争を遂行することが出来なかった原因の一つである。(多号作戦)

とその前近代性を指摘し、陸軍についても、新任の方面軍参謀副長として着任する小沼少将は東京を出発するに際し、

レイテ島の山は見えた。敵は次はルソン島に上陸して来るから、

貴官は極力防備を強化せよ。ただし方面軍には従来通りレイテ戦を続行させよ。(二十七、敗軍)

という「下級兵団」に対する、「二重底の指導」を行なうのが日本陸軍の伝統であると言う。

そもそも今回の戦闘が「本意ながら消耗戦に巻き込まれ、かりに勝ったところで戦果を拡大する手段がなかった」という意味で、真の勝利に繋がるものではなかった。敗戦を遷延するだけの効果しかない攻撃であった。

「戦力の不足を、高度に訓練されたパイロット、砲手の技術でカバーしなければならなかった。しかしこういう人的資源は有限であり、補充が間に合わなかった。もとは海員や漁師などの志願水兵から成っていた日本海軍も、捷号作戦の頃(フィリピンでの戦闘)は

召集兵が主だった。その時奴隸的な訓練、船内生活の前近代性が障害となった。新しい水兵に戦意より怨恨が積もった状態で、戦場に臨ませるほかはなかった、などなど、近代日本の歴史の結果である無数の要因が重なって、捷一号作戦を成功させなかったのである」(九・海戦)と言う。まわりまわって日本近代化の未熟さ、欧米列国に追いつかんとするための性急な富国強兵策を強行するところから民兵徴兵を強行させた結果が必然的にその戦闘の成り行きを規定しているというのである。「日本陸軍の時代遅れの体制」「参謀本部の頭の古さ」、それらはヨーロッパの新興国でロシア、フランスの両面作戦に勝つために劣勢包囲をとらざるをえなかったドイツにならって、「背伸びした戦略に伴う形式的な機動作戦、兵士の精神力への依存など、日本陸軍の伝統は、一九世紀末の形骸化したドイツ兵学を基にして作られた」。日本軍隊の「大元帥陛下から一兵卒に到るまでの統帥の一貫した組織であるが、それだけにすぐ諸単位は保守化し、形骸化する」体質は、日本の近代化の歴史そのものが示すはずみの体現であったとするのが大岡の日本軍隊論であった。「リモン峠で戦った第一師団の歩兵は、栗田艦隊の水兵と同じく、日本の歴史自身と戦っていたのである」と第十八章の「死の谷」を結ぶ。この問題は、残念ながら現代にまで持ち超され、克服されていないことを社会の諸現象に見ざるをえないであろう。こうした日本の前近代性は、何よりも指導者としての中央上層部の責任に求められる。

六 中央への批判

これは現地軍司令にかかわることであるが、リモン峠で「敵の南下を防いでいるだけ」で「いつまでたってもカリガラ平原」に進出できない四十九聯隊と第一聯隊に克蘭アン、マナガス方面の米軍を海上へ追い出せと命令が下る。できない相談で司令官としては「師団の戦力低下を認識していて、攻撃命令を出しておいて、ちょうどよい防禦になる、という判断をした」のであって、これは「劣勢防禦の一種の定石であり、前線武将の闘志に対する不信感から、後方で形成された通念なのであった」と言う。ここには前線基地と本部の意志疎通の断絶がある。第十五章「第二十六師団」では、レイテ戦の後の米軍上陸地をルソン島と見た大本営が、もともと中国戦の経験のある第二十六師団を釜山から南方へ送ることになる。ここで師団長が山県栗花生中将に替わるが、この山県はニューギニア戦での敗軍の将で、「ユエから幾度かの後退の後、待命になって釜山まで来た時」に第二十六師団長に任命された人である。大岡は、この人事について

高齡の將軍が死地の追いやられたのは傷ましい限りである。その名の示す通り、陸軍の元勲山県有朋の一族であるが、大本営は敗北を知った軍人を内地には帰らせないのであった。(十五、

第二十六師団)

と記す。大本営の意向として敗北守秘主義があるのだろうか。この山

県については、第二十九章「カンギボット」で、バレンシア南方でオルモック街道を越えようとして敵に発見され追撃砲と機銃掃射を浴びて全員戦死したことを記し、そこでも、かれが山県有朋の一族であることを言い、ニューギニア作戦の第四十一旅団長になりながら上陸地点が浅く、湿原に妨げられて戦闘に参加できなかったことを言つて、

十九年初め釜山まで引き揚げて来たが、大本営はこういう將軍を東京へ帰らせない。新しくルソン島派遣の二十六師団長に任命、続いてレイテの死地に派遣されて、非命の死に遭つたのであった。(二十九、カンギボット)

と記す。この重複する言説には、大岡の中央へのよほどの思いがあるのだろうか。

米軍による妨害にレイテ補給がかなわずと考えたフィリピンの総司令官であった山下奉文中将は、レイテを避けてルソンでの決戦を進言する。その意を受けて武藤参謀長が総軍司令部を訪れ、飯村総参謀長に趣旨を説くが、飯村は「レイテ決戦は大本営命令であるから遂行されねばならぬ、と繰り返すだけであつた」。ついに武藤は「大本営も総軍も戦局を見る目を失っている。多くの將兵を無駄死させてよいのか……」と「頭へ来て怒鳴つた」と言う。珍しく直接話法を使つての現場の再現は、大岡のこの場に寄せる思いを示すものであろう。このように現場がどうあれ、上からの命令に屈伏せざるをえないことを「承諾必謹」と呼んだらしい。

レイテ戦の大勢は決定し、日本軍が壊滅状況にあるなかに大本営は、十二月三日、一貫してカリガラ湾上陸作戦に固執し、レイテ島奪回を指示する。大岡は「三個大隊レイテ湾逆上陸に到っては、正気の沙汰とは思われない」とし、このような「空想的な机上作戦を推進して、無益な犠牲を重ねた責任が実は大本営第二課にあったことを」『大本営機密日誌』に暴きだす。しかしこの「正気の沙汰とは思われない」指示にも、山下中将は「承諾必謹」の思想によって諦め従わざるをえなかったと言う。その頂点が昭和二十年一月の、小磯首相を抜きにした「陛下」の「統帥部はレイテ決戦を止めて、ルソンで決戦することに変更した」という発言、「同じことを天皇は明けて一月二日、内大臣木戸幸一に伝えている」と言う。天皇自身が、すでに「レイテは天王山」と言った手前、国民にどう説明するのかと質すと、「小磯首相は実は自分もたった今聞いたばかりですと実情を申し上げ、日本の政治家の永遠の台詞「十分検討の上、善処いたします」と奏上して退いた」と記す。当時の大本営の統帥部と天皇の位置関係など、わたくしには不明の点が多いが、現地状況と離れたの精神主義的な中央の机上の作戦、その無理を知りつつ「承諾必謹」せざるをえなかった現地の司令部の実情を大岡は指摘するのである。この無理な司令を発する中央統帥部の本音は、一月二十日、大本営が決定した「帝国陸海軍作戦計画大綱」に集約されているようである。すなわち二月以降八月まで五十個師団の動員をかけ、太平洋岸を固め火炎瓶のみで一時敵の進撃を停顿させ、温存

しておいた特攻機で敵の艦船をたたき上陸作戦を頓挫させたところで、「有利な条件で和平交渉に入ろう」という、あいもかわらぬ夢のような計画であった」(二十九、カンギポット)と言う。この本土決戦の作戦については、当時、兵庫県竜野市の中学に戦時疎開していたわたくし自身が、軍事教練の教官や、まわりの教官たちから訓示を受けていたところである。まさか「有利な条件で和平交渉に入ろう」という「迷惑によるものとは思ひもしなかったのであるが。

このような中央の身勝手な方針に「承諾必謹」し、苦悩するのが現地の司令官や兵士であった。

昭和十九年(一九四四)の八月、レイテ戦に備え、飢えをおして陣地の構築、飛行場建設にはげむ現地軍のなかから、ついに初年兵一名の自殺者を出す。そこに牧野中将の「わが守るこの島なるぞ、夷ばら、寄せなば千々に砕きつくさむ」の詠を引き、

少なくとも六月の師団討伐以来、師団は優秀な米軍の兵器を持つゲリラと不断の交戦状態に入っていたといっても過言ではない。(二、ゲリラ)

と第二章「ゲリラ」を結ぶ。

このフィリピン方面の総司令官に任にあたった山下奉文中将その人が、かねがね東条首相との仲がよくはなく、「二・二六事件に際して、反乱部隊に同情的であったので、天皇に忌まれ」、マレー作戦の成功にもかかわらず「満州の第一方面軍司令官」としてはされてきたのが任命されたのであった。その山下は米軍のレイテ上陸を「相

当の準備と確信があつてのことに違いない」と読んでいた。にもか
 かわらず迎え撃つ日本軍たるや「レイテ島には兵力の配置、陣地の
 構築も出来ていなければ、軍需品の蓄積もない」状態であつた。「慎
 重合理的な知将型」であつた山下の「進撃中の日記は部下将校の無
 能と墮落に対する不満ばかりである」としている。

レイテ戦の末期、福栄中将のつた醜態についてはすでに述べた
 ところであるが、この福栄のセブ島転進に続けて、友近参謀長も、
 地号作戦（つまりレイテ脱出）を打ち明けられた片岡地中将が、部
 下一万をリモン峠に死なせている。戦力の消耗した師団がセブへ転
 進しても、「何ほどの働きが出来るか疑問である」。部下ともどもレ
 イテの土にしてほしいと言つたという。福栄の行動と並べることに
 よつて片岡の行動は美談となるであろう。しかもこの福栄にしても、
 その脱出の「実情は人が羨ましがらるほどのことはなかつたのである」
 と言ひ、その内心はとにかく本音が命惜しさにあつた。もちろん大
 岡その人の本音は福栄よりも片岡に共感するのだが。福栄の人がら
 に対する大岡の思ひはとにかくとして、破局の一方の原因が中央に
 あつたとする大岡の思ひは揺るがない。

七 戦争と司令官

兵卒の生命を左右するのは、戦う相手であるとともに、兵卒を統
 率する司令官であつた。レイテ戦を後援する輸送は失敗におわる。

この時、総軍は、ビルマ、マレー、オーストラリア北部への備えも

『レイテ戦記』論(山下)

あつてサイゴンへの引き揚げを大本営からもとりつけていたのだが、
 しかも山下中将は「レイテ戦は依然続行する」とくりかえすほかな
 かつた。それは山下にすれば敵主将のマッカーサーと対決したいと
 いう武將の自尊心があり、ルソン決戦に備えてレイテの航空基地は
 破壊しなければならなかつた。この作戦がレイテ島兵卒の運命を決
 定するのである。一方のマッカーサーも、フィリピン再進攻に先立つ
 て、ルーズベルトにハワイに呼び出され、ニミッツがサイパンから
 硫黄島・小笠原を伝つて直接本土を攻めようとするのを、強行レイ
 テ上陸を主張した。それは二年前のコレヒドール脱出の恥辱にあつ
 て「アイシャル・リターン」と約束していた面子があつたし、さら
 にかれには大統領選挙への野心もあつた。マッカーサーの本心は、
 アメリカの面子を救ふことであつた。三年前、アメリカ兵は日

本兵が来ると逃げた。俘虜となつて歩かされるところを、フィ
 リピン人に見られていた。やっぱりアメリカ人の兵が日本人よ
 り偉いのだ、武器もいいし、チョコレートもある、強い、とい
 うことを一年後に独立を約束した国民に見せなければならな
 かつた。(二十、エピソード)

そのマッカーサーはレイテ戦の末期、オルモック海岸が米軍の手中
 に落ちたとはいへ、いまだ二万人の日本軍が残存するにもかかわら
 ず、「マッカーサーはラジオを通じて「レイテ島上の戦闘は終わった」
 と宣言する」。それは「聖なる救世主の誕生日」であつたからであ
 る。この性急な宣言が、その場の兵卒の死を招くことになる。所詮、

戦争は人間の判断による。面子にとらわれる司令官の判断が多くの兵卒を死に追いやることになるのである。この大岡の思いには、このようにかれの戦争論がある。

日本軍の側にあつては、レイテ戦全体が、台湾沖航空戦を大勝利と誤り判断した大本営の「観念的な机上作戦」の上で決定したものである。一方、米軍の側も、レイテ突入をあきらめて後退する志摩艦隊を、オルデンドルフの米戦艦隊は「不撓不屈の攻撃精神を持つ日本の艦隊が」いつ引き返してくるかも知れぬと海峡出口を離れることができなかった。このことが次の日の栗田艦隊の戦闘に「応分の貢献をした」というのである。ブラウエンの戦いでも、日本軍の補給計画の遅延からその戦闘部隊ははまだ少数であつた。これを米軍の情報部は、一般観察として「ブラウエン地区の日本軍の組織的な抵抗は終わった」と判断することになるのである。

戦争の終結を期待するのは日本軍ばかりではなかつた。リモン峠の米軍も同じであつた。しかし戦争を喚起したエネルギーは、つきるまでとどまらない。

ヨーロッパと太平洋には、巨大な兵器と軍事物資が送られ続け、それはハワイ、オーストラリア、ニューギニアに蓄積されていた。戦争を続けなければ、アメリカ経済がひっくり返ってしまうのであつた。日本が突然降伏してしまつたら、ルーズベルトが困つたらう。あくまでも定量砲撃で砲弾を浪費するのは、アメリカの軍需生産を山滑に進行さすために欠くことが出来な

かつたのである。(十四、軍旗)

と戦争を支える、というよりも戦争を必要とする経済を見ている。しかも現場に戦う兵士たちにとっては「生きるか死ぬかの問題であつた」。勝敗の結果は、はじめからわかつていながらリモン峠に五十日の激戦を繰り返した。それは

双方に敵情の判断、用兵の過失があつて、今日の眼から見れば、なぜこんなことをしたかと思われるようなことが多い。しかし人間のすることであるから、過失はつきものである。それが戦争というものである。(十八、死の谷)

ここにも戦争を進める人間を冷静に見る眼がある。

ドラグの水際に置き去りにされた二十聯隊第三大隊の兵士。その大隊長河田少佐は、みずからの任務が捨て石であることを自覚して自決する。「決して俘虜になるな」と命令されていた兵士たちは、「自決」と「玉碎」の意味を理解しかねるところへ、「自決命令は取り消し、ダガミ師団司令部集合」となる。これを「退却命令は常に攻撃命令より早く伝わるのである」とするのが大岡である。結局自決を急いだ河田に対しては、「大隊長発狂」のうわさも出たという。思いつめる大隊長と、それを理解しかねる兵士たちのずれ、その急激な転進が皮肉とユーモアをもってとらえられている。ユーモラスと言えば、ギナロナ川で「裸になって水浴している六人の日本兵を捕らえた」と言ふ。米側の資料による記録であるうが、「この辺は米軍の二つの上陸地点の中間」で「艦砲射撃も爆撃もなかつたので、そん

な呑気な兵隊もいたのである」と言う。死と隣りあわせにしながら、束の間の安息に気を許す人間への関心があるだろう。

戦鬪の苛酷さは、勝利を重ねる米兵の側にも感じられた。リモン峠の死鬪。二日にわたる死鬪は、「最も凄惨なものとなり、「米兵も連日の戦いに気が立っていた。……自分たちに苛酷な戦いを強いる日本兵に対して腹を立てていた」には、大岡の米兵への同化を思わせる。敵、味方の別を越えた戦鬪の苛酷さに、それを体験する兵士たちへの同化を見せている。ブラウエン斬りこみのための苛酷なルビ越え。「この方面の脊梁山脈中には、多くの日米両軍の兵士の骨が残っているはずだが、もはや永遠に収集される機会はないであろう」と言う。この大岡の思いは人間としての戦鬪への怒りであろう。

日米両軍のいづれにもせまる苛酷な戦鬪は、人間の判断・感情を越えるものであり、敵に対してというよりも、戦鬪そのものに対する怒りをかきたてるというのである。オルモックの戦いに、砲撃のあまりにもの激しさに放心して敵軍にむかって歩きだし小火銃の犠牲になった日本兵士のあったことを言う。

台湾沖航空戦の勝報は「多くの未熟連のパイロットが見た幻影」であった。結果として、アメリカ機動隊の健在を大本営海軍部は知っていたながら、その真実を陸軍に通報しなかった。もし陸軍部がこの事情を知っていたらレイテ決戦は行なわれなかったかも知れない。しかしこのような指揮の誤りは、一個人の責めではなく、「その個人を含む集団全体」に帰さねばならないと、歴史家マルク・ブロック

『レイテ戦記』論(山下)

の説を引く。天皇制国家のみならず民主主義国家でも、軍部には形骸化した官僚体系があり、その内部のセクシヨナリズムや競争心、嫉妬が人にゆがみを強いると言う。この苛酷な戦鬪に生と死の運命を分かち一つに、その人の性格があることは、リモン峠の戦鬪に夜間行動に道を迷い作戦を誤り「申しわけない、残念だ」とつぶやき続けていた高山中尉が、やつのことで大隊本部に近付き、指揮官の少佐を見て、「ほっとした安堵の念から不用意に立ち上がって拳手の札をしたところを」狙撃されて戦死をとげたと「言われる」としている。感情に生きる個人の生死を見届ける大岡の執念を思わせるくだりである。これは確かに軍記物語の類型的な人間像の及ぶところではない。

八 死者の声

このような人々の死の場面を描くことにはいかなる意味があるのか。こうしてにわか仕立てに決定された作戦(レイテ戦)の結果、無意味に死んでいった兵士がいる。そのために悲しんでいる遺族がいる。(五、陸軍)

どこの国でも戦争の指導者は似たようなものである。死んでいく兵士の身になっていては作戦など立てられるものではない。(同前)

七月末のハワイ会議では、一〇〇万の損害の予想される日本本土上陸作戦が決定されている。(同前)

そらおそろしくなるような個人の抹殺作戦というものである。国家のない国。正義のための戦争よりは、不正義のための平和を叫んだのは井伏鱒二であった。まさに

死んだ兵士の霊を慰めるためには、多分遺族の涙もウォー・レクイエムも十分ではない。

家畜のように死ぬ者のために、どんな吊いの鐘がある？

大砲の化物じみた怒りだけだ。

どもりのライフルの早口のお喋りだけが、

おお急ぎでお祈りをとなえてくれるだろう。

ダムラアンの戦いに八名の兵が野砲大隊に斬りこみ、砲を「完全に使用不能にした」。しかも「斬込隊は全員戦死した」。

この斬込隊を指揮した将校の名前も、砲を破壊した兵の名もわかっていないが、恐らく独歩十二聯隊第二大隊(井上隊)の兵士であろう。(二十、ダムラアンの戦い)

と言う。大岡にすれば氏名不明の隊の全滅を記録しなかったのである。

死者の証言は多面的である。レイテ島の土はその声を聞こうとする者には聞こえる声で、語り続けているのである。(三十、エピソード)

一人一人の死者の声に耳を傾けようとする者のみにしか語りかけてこない物語、それはやはりいくさ物語や叙事詩ではない。一九八五年八月十二日の日航ジャンボ機墜落で死亡した人々の遺族の一人、

川北宇夫¹⁵⁾は

「私の周囲をみると、事故の遺族のほとんどの方が、お坊さんをお呼びしてお経をあげる、お布施を差し上げる、そういった宗教的行事をすることが供養だと思いきまれている。それで心の満足が得られるのなら、悪いことではない。しかしそれだけで本当に癒されるのだろうか。私は慰霊とは死者との対話だと思う。双方向の対話をせずに一方的に供養しても、死んだ人は喜ぶだろうか。双方向の対話だとすれば、死んだ人は何を語りかけているのだろうか。きっと異口同音に言うことがあるに違いない。こんなことはもう二度と起こして欲しくないな、と。もうひとつは、たとい事故が起こっても死にたくない、と言うだろう。だとすれば、私たちはその言葉をまともに聴き、語れない死者の代わりに私たちがそれを訴え、行動を起こす。それが慰霊ではないでしょうか」。

と言う。この場合の慰霊も、いわゆる風化した「鎮魂」ではない。いったい何が大岡をして叙事詩や人々とともにする鎮魂を拒みしめたのか。それは日米の歴史であり、しかも現実でもある。すなわち大岡は第二章に「ゲリラ」の章を立て、大戦前に現地の大地主がアメリカの資本家に協力して小作人を飢えに追い込んだこと、フィリピンに共産党が結成され、反米ゲリラが行動したのもこの事情によること、一九四二年、日本軍の進駐後は、米軍を駆逐しながら現地調達主義から日本軍が掠奪の暴挙に及ぶという歴史があったことを

明言している。ほかならぬこの現地のゲリラが日本軍を悩ませたのである。しかもその

ゲリラもまた「レイテ島解放のために」献米を強要する点では、日本軍と似たようなものだった。彼等がその米をタクロバンへ持って行って闇で売っている、とハロの町民はいった。(十一、カリガラまで)

と言う。「町民」の発言の真実をいま確認するすべはないが、少なくともこの種の噂が流れたこと、大岡が町民のレベルで事態を眺めていたことは事実である。ゲリラにも四種類があるとはすでに指摘したところである。

一九四五年三月二十六日、セブ島に上陸したのがアメリカル師団。この師団は、ガダルカナル島の戦いの時点で編成された混成師団である(二十九、ガンギボット)。この「アメリカル師団はもともと俄作りの師団で、軍紀は最も乱れていた。……セブ島の戦闘の最後の段階では、多くのマラリアと花柳病患者が出た」と言い、

一九六八年ベトナムでソンミン村虐殺事件を起したのも、新しいアメリカル師団である。(三十、エピソード)

と補注を施している。つまりこの『レイテ戦記』を書くにあたって、大岡はその執筆時点のベトナムにおける米軍の動きを念頭においていることに注目したい。

マッカーサーがフィリピン諸島の隅々まで米軍を派遣したのは、日本軍に占領された資源を、フィリピン人のためではなく、ア

メリカの投資家と金持のフィリピン人のために確保するためであったと信ずべき理由がある。(同前)

四代にわたり植民地民としての苦悩をなめ、一九五〇年に六十歳になった現地の老人が、かれの孫に

スペイン人はよくなかった。アメリカ人は悪かった。日本人は一層悪かった。しかし最低なのは二度目に来たアメリカ人だ。

(同前)

と言ったと大岡は記す。大岡の執筆動機の一つに、執筆当時の、きわめて現代的な状況であったことに注目するのが肝要である。上述の「死者の証言」を語る前に、

レイテ島の戦闘の歴史は、健忘症の日米国民に、他人の土地で儲けようとする時、どういう目に遭うかを示している。それだけでなく、どんな害をその土地に及ぼすものであるかも示している。その害が結局自分の身に撥ね返って来ることを示している(同前)。

と記していた。この現代を見る冷静な大岡の目とその怒りは、日本商社在外駐在員の生活を戯画的に描いた『19階日本横丁』の著者堀田善衛の姿勢とも通じるだろう。その堀田がやはり『平家物語』に冷淡なまなこを放っていた⁽¹⁶⁾。かれらのいくさ物語論をどう評価するかが今後のわたくしの課題ではあるが、古典のなかでも、いわゆる軍記物語と呼称される作品群、大岡の言う叙事詩に対して、このような痛烈な批判のあることを、わたくしも忘却するわけにいか

い。

九 方法

『レイテ戦記』が単なる戦闘の記録でないことは、これまで述べて来たところである。戦闘の経過を語るのに、大岡は他者の視点を持ち込む。それは日本軍側の資料を異化するための方法である。例えば米公刊戦史が日本軍の斬り込みを記録するのに採用したジャン・ヴァルティンのルポ『昨日の子供達』について、それが「新聞記者が打電するような勇ましいものでもユーモアに充ちたものでもない」戦闘の現実を、「多少の文飾は」あり、「聞書によって個人の功績を記すのを怠っていないが」、「戦争がもたらす非人間的な状況に目をふさいではない」として評価し、戦記にとりいれている（八、抵抗）。バイバイでの戦いの最終段階で、米軍陣頭の一角に突入し、竹藪にたてこもって全滅した独歩第十一聯隊の第二大隊第六中隊の死闘を、一時は米軍も危うく、これを「血染めの竹藪」と呼んだ米側の資料から補う。米軍の後方擾乱を狙ってブラウエンをパラスシュートにより奇襲を敢行するが、実は元、日本軍が使用していたブラウエン飛行場群が、いずれも「舗装されず、土を均しただけのもので」「鋼板を敷くための基礎工事もつけなかった」しろものであるため、米軍はタナウアンへ引越していた。そのため「実効は殆どな」かったことが「米側の文献に、日本軍の間抜けさ加減、情報蒐集不足の例として引用されている」と言う。これを日本軍側

の資料『大東亜戦争戦史叢書』によると、カリガラ湾岸道が「完全に敵のものになるであろう」ことを覚悟のうえで、「爾後ノレイテ作戦ヲ有利ナラシムル為」ブラウエン付近ニ進出セシメ敵ノ航空基地群ヲ覆滅セシメ」ようと軍をすすめ、中でも「小泉一郎少尉を長とする一五三名でブラウエン西側高地を占領し、第三十師団主力の進出掩護、第十六師団との連絡、ブラウエン飛行場斬り込み」の任務で急進、右のように斬り込みを実施していた。「その武功終始抜群、軍司令官は後日感状を授与した」と記録している。一方でリモン峠の合戦をめぐって米軍ヴァーベック大佐の第六軍情報部へ提出した資料があり、火炎放射器と白燐砲弾の利用により日本軍を苦しめたが、「敵（日本軍のこと）の地形利用ずばぬけて巧妙である」ことを記していることを言い、この文書が「警告的誇張があると思われるが」、「わが（日本）第一師団の兵士がいかに戦ったかについて、最も生の記録の一つである」、それは「リモン峠でよく戦って死んだ兵士に対し、これ以上よき供え物はないと思われる」と結んでいる。日米両面にわたる戦闘の厳しき、日本軍の情報蒐集の不足による間抜けさなどを指摘しながら、日本軍の兵士が困難な状況のなかに、いかによく戦ったかを明確にし、死者を葬ろうとすることにより鎮魂となっている。事実と判断したことを書くことのみが死霊を慰める唯一の方法であると考えている。そのために公刊戦史に期待できない、日米両方の資料を調査して引用し、視点についても日米両方に同化しつつ、対象を描きとらえている。それは単に複数の資料を

援用した結果としてあるのではなく、戦闘の現実と、それを戦った兵士への思いが可能にしたのである。

バロの水際陣地の野砲二十二聯隊の兵士たちは、海上すれすれに近づいて来る一機を見て首を引込めた。轟音と共に頭上のヤシの梢をかすめて飛ぶ飛行機の翼の下に日の丸を認めて、歓声をあげた。しかし続いて五機のグラマンが来たので、また首を引込めねばならなかった。

「なんや、逃げよんのか」と彼等は呟いた。

「これらは生き残った兵士たちが戦後語るところである」(七、第三十五軍)と言いながら、このような直接話をあえて援用するのも、大岡の戦闘場面への同化の思いがあるからにはかならない。レイテ戦の初期、米軍の上陸を前に、衛生兵は「繻帯を全部草色に染め替えてという命令を受ける。赤堀伍長がフィリピン人の女性を雇って作業を行なうが、「通りがかりの古兵」が、

「おい班長、衛生兵に白旗を作らせねえように、染め替えるのかね」

「ばかなことをいうな」赤堀伍長はむつとして答えた。「白い繻帯は夜でも目立つ。負傷兵が狙われないためだよ」

と答えたと言う(八、抵抗)。この直接話法の援用にも登場人物の手柄を描き分ける大岡の、作家としての現場への参加、同化がある。

リモン峠での両軍の死闘、

生きながら焼かれる日米の兵士の叫び声、……壕の中にうづく

『レイテ戦記』論(山下)

まって火が頭の上を通りすぎるのを待っていた日本兵は、激しい息遣いを近くに聞いて、首を出して見た。真赤な顔をした兵士が匍って通りすぎるところだった。声をかけたが聞こえないらしく、はあはあ息をしながら、両手で焼けた萱の根をつかんで匍って行った。腰から下も真赤だった。腿から下に脚はなかった。(十三、リモン峠)

この言説にも、おそらく体験者の語り、もしくは引用の資料があるのだろうが、この言説の文体は、まさに大岡が語り手となって語る言説にほかならない。もともと地形の描写に執着する大岡であるが、しかしこれは……レイテ島の敗兵が住んだ環境である。組織的戦闘は終わっており、地形が勝敗を左右することはなかったが、その気候と土壌は兵士の日々の生活に重要な影響を及ぼした。(二十九、ガンギポット)

事実、地形が兵士の生死の別れ目を決定することもあったからだと、言う大岡の思い入れがある。

この戦記は、全体をレイテ戦の経過に即し、時間の経過にしたがって進行するのを原則とするが、しかしレイテ戦の開始に先立って昭和十七年五月二十五日当時のレイテ島への日本軍の進駐を、いわゆる後説法を使って回想し、カトモン山の攻防に

日本側の記録によれば、この地区には部隊は配置されていない。米軍の見たのは、恐らくカトモン山の第九聯隊が派遣した斥候だったろう。(八、抵抗)

と補説を加えるのは作者としての大岡である。それに前に、上陸に備えレイテ湾をおおうばかりの米艦船を見た日本兵のつぶやきを見たが

台湾沖航空戦で大勝を博した日本空軍が、なぜこの好餌を指をくわえて見ているのだろうか。(七、第三十五軍)

と、その思いを同化して語り、

これらは生き残った兵士たちが戦後語るところである。(同前)とするが、これは時間の順序から言って、後日、当時にふりかえって回想する先説の後説法である。それは作者の大岡にとって当時を客観化しつつ台湾沖航空戦の誤報が、レイテ戦の行方を決定したという批判があるためである。リモンの北方稜線を守る日本軍が無理を覚悟の陣を布く。そこへP38の二波にわたる攻撃を受け、多くの犠牲者を出す。このP38は米軍の輸送隊が運んできた鋼板を敷いて急ごしらえしたタクロバン飛行場の臨時滑走路を飛びたつたものであった。ついで緒戦方向を誤った

栗田艦隊があの時突っ込んでいたら、という話はもう繰り返さないが、もしこの鋼板が失われていたら、P38の到着は一週間は確実におくれたので、レイテ島地上戦闘の様相も少し変わっていたかも知れない。(十三、リモン峠)

と言う。ここにも回想談を使つての大岡の思いがある。前にニューギニアに敗退した山県中将が一旦満州へ回されていたのを、第二十六師団として再度編成されたことを見たが、

高齢の将軍が死地に追いやられたのは痛ましい限りである。(十、第二十六師団)

と、その悲劇的な行方を見通しての先説法をとるのは、もとより「敗北を知った軍人を内地には帰らせない」大本營の方針に対する大岡の思いがあるからである。いわゆる軍記物語でも、このように錯時的に作者や語り手の判断や批評を語ることがあるが、『レイテ戦記』の場合、とくにこの傾向が顕著なのは、やはり作者大岡が前面に身を乗り出すところに由来するものと思われる。

十 作者の眼

軍記物語については、それぞれの作者がだれであるかが関心の対象になりながら、多くは作者が不明である。それは、たとえば『平家物語』について信濃前司行長を最右翼に考えながら、しかもかれは東国生まれの盲目、生仏が協力したとあるように、もともと物語を作者個人のいとなみとは言えない事情がある。それに、その物語を生仏に教えて語らせ、後の琵琶法師が語り伝えたとあること、つまり語り手の伝承の中に物語が生成するということがあり、一層個人としての作者のかけを見えなくしてしまうものであった。それに対して、いわゆる戦記に属する、とくに『レイテ戦記』の場合、上述したところにも明らかのように、作者としての大岡の存在が大きい。もちろん、ミンダナオ島の一等兵であった大岡にとってレイテ戦は陸・海・空いずれも直接の体験ではなく、種々の資料や体験談を介

しての間接的な体験ではあるが、あたかもその場に居合わせ、体験したかのような同化の姿勢が顕著であることも述べて来たところである。そのために物語論一般に考えられる語り手の存在を否定することもできない。しかし、そうは言いながら、大本営の会議で「絶対国防圏内における海陸反撃作戦が決定し」たことについて、その考へかたを

海軍は真珠湾以前の古典的迎撃作戦に戻ったことになる。(一、第十六師団)

という、戦闘の全体を異化する作者の眼、台湾沖航空戦の誤報に関する

もしこれが事実とすれば、世界海戦史上最大の戦果で、アメリカが開戦以来進めて来た空母大量建造は、基地空軍の攻撃の前に一度で潰滅したことになる。(四、海軍)

という注釈の挿入、前のマッカーサーの名誉心にかけての「アイ・シャル・リターン」との発言をめぐって、

一 武將の虚栄心のために、比島上陸が決定した、その結果小磯首相がレイテ天王山と叫び、大量の日本兵が注入され死なねばならなかった、といわれることがある。占領時代が過ぎて、マッカーサーに対する反感が一般的になったころ流行した説であるが、幾分原因結果を感情的に取り違えた憾みがある。(三、マッカーサー)

とする世の人々の思いを異化する作者のさめた眼、栗田艦隊のサ

ン・ベルナルディ海戦でのしくじりについても

相手は最大速度一八ノット程度の護送空母群だったのだから、なにもあわてることはない。ゆっくり隊形を整えてから、風上へ廻るなど余計な手間をかけず、直進すればすぐ追い付いて殲滅出来たという結果論のだが、私の素人考へでは、咄嗟の判断にそこまで要求するのは苛酷なような気がする。(九、海戦)

とやはり、世評から一步距離をおいて見ている。リモン峠の死闘をめぐって

私がリモン峠の諸隊の行動を逐一報告しなければならないのは、それが壕の中にうずくまった兵士の生死に関係しているからである。(十四、軍旗)

として、戦闘の流れもさることながら、個人としての人間の生死にこだわり続ける大岡の思いがあるからである。

しかし師団総員一二、〇〇〇名のうち帰還者約三〇〇名……という惨状だけは避けられたかも知れないと、少なくとも遺族は思うであろう。(十六、多号作戦)

という遺族の身になっての思いが、いわゆる軍記物語的世界を拒否するのであった。⁽¹⁷⁾リモン峠の戦闘の一面について、

次のような情報を土居参謀に伝えた。後出の記述と重複することになるが、当時軍がどの程度の情報を持っていたかを知る貴重な資料なので土居参謀のメモにある通り写してみる。(十八、死の谷)

というのも、戦闘の全体の流れよりも土居参謀その人のおかれた状況にこだわるからあえて重複をいとわない。つまり物語として完結することを拒否するのである。こうした大岡の眼が、上述したように、風化された鎮魂を拒むことにもなった。実際には大岡流の鎮魂であることを否定しがたいのであるが、軍記物語を手がける一人としての私は

もし私がアメリカ人なら、この二つの迂回部隊の行動について、叙事的放浪戦記が書けるのだが、そのため悲惨な死を死ななければならなかった同胞がいるため、それが出来ない。(十三、リモン峠)

という大岡の思いを以上のとらえる。事実、一九六九年八月に書いた『ミンドロ島ふたたび』には、現地に現地人の心をいためないように配慮しての木ノ十字架の慰霊碑を立てたことに言及し、特攻隊の体験を

空の见えない高みから、電光のように降りて来てきみの進路を突っ切り、弾を撃ちながら下の方の空間へ抜ける、或いは意識するひまもなく、きみの身体は銃弾に貫かれて、機が落ちて行くのか、意識が落ちて行くのかわからないまま、きみは暗い死の中へ落ちて行く。

と第二人称視点で語っている。亀井秀雄のこぼを借りれば死者が立ち上がってくるような幻覚を感じさせる。戦後の戦跡を訪ねる遺族が、現知人の思いをばばかって、

まるで悪いことでもするかのように、二五年前の死者をこっそり弔わねばならぬことに胸をつまらせつつ、遺族は涙を流すのである。

と言う。フィリピンに対する日本の歴史がある。現地に死者の鎮魂をすすめることを妨げる歴史があるのであった。

祖国や家族を救うことを信じて戦い、死んでいった兵士たち、

その死の瞬間に考えていたことは、米夷の虐殺のほかであったはずはない。死者はその怨念に凝り固まったまま死に、祖国から幾千里離れた異郷に骨を曝しているのである。

そのような地に、なまじつかな鎮魂や物語はありえないとする大岡の思いは理解できる。かつての日本軍の基地がアメリカの原子力空母や潜水艦に使われている現実、身近に体験する朝鮮戦争への思い、ベトナムでのアメリカ軍の残虐行為を見、再び若者を戦地へ送り出そうとする人がいる現実、エロとレジャーに麻痺した大衆を生み出すわが国、戦後の政治への怒りを考える時、大岡はやはり死者に成仏してくれとは言えなかった。亀井が、鎮められねばならないのは死んだ兵士たちだけではなく、大岡自身の心でもあったと言うわけである。

ただ、いくさ物語を専攻してきたわたくしとして、ここで大岡のいわゆる叙事詩を否定するものではない。それは単なる過去への感傷的な回想や叙情に流される意味での叙事詩ではない。源氏を名乗る将軍や、その源流とも言うべき源頼朝を賛嘆するものでは勿論な

い。つづく飢饉と疫病に「民の死者は無数」、「死屍爛壞の臭ひ触るべからず」という惨状を呈する洛中の状況のなかに平家琵琶が寺院で演奏され、「悲宛豪壯曲折万端、聴く者感泣して已まず」（碧山日録・寛正二年 一四六二・三月）と言う。その頃、琵琶法師で洛中に活動する者、五、六百人を数えたと言う。時の將軍足利義教は平家琵琶を嫌ったと言う。当時のこうした平家琵琶の流行を、単なる回想的な叙情の営みと見るのは世情からして当たるまい。大岡の言う作家個人の目とは、また違った、人々の思い、恐れを代弁して死者を呼び出し、その体験を語らせることで、死者と生者との対話を保障するものこそ、琵琶法師が平家琵琶を語る場であったのだろう。そうした社会相のなかで受容されるいくさ物語の再発見こそ、今後のわたくしの課題と考える。

注 (1) 家康は源家康を自称した。

(2) 一九三六年、『戦記物語の研究』が筑波書店から刊行された。研究史年表によれば、五十嵐力、高木武、富倉徳次郎、佐々木八郎の諸氏が、この用語を踏襲している。戦争中のことである。

(3) 亀井秀雄の『個我的集合性—大岡昇平論』（一九七七年、講談社刊）は、そのすぐれた成果の一つである。

(4) 「レイテ戦記の意図」『日本文芸論集』2 一九七〇年三月など。

(5) 前項の甲府での講演で、大岡自身が「殊にこの甲府は四十九聯隊がレイテへ参りまして、非常に激戦地のリモン峠を守って大変健闘したわけでございます」と語っている。

(6) 『ミンドロ島ふたたび』一九六九年十一月編。

『レイテ戦記』論(山下)

(7) 「大岡昇平・死者の多面的な証言」『群像』一九七二年二月。

(8) 注6

(9) 「軍参謀の手記—比島敗戦の真相」『丸』別冊十一「大いなる戦場」一九八九年三月。

(10) 大本営発表(昭和十九年十月十九日十八時)を当時の朝日新聞が報道している。ちなみに伊藤整の『太平洋戦争日記』にも関連の記述が見え、十月二十六日の項には、「二十四日朝出社、出版部のもの、台湾沖戦勝を兼ねて秋の旅行に伊豆の大仁へ出かける……」と見える。

(11) 注9

(12) 当時の新聞は数日にわたって、この大本営の発表を報道している。十月十六日の朝日新聞はこの戦果を「潰滅直前の第五十八機動部隊 宿怨の『最強艦隊』今ぞ討つサイパンの仇」と見出しを立てて書いている。伊藤整の『日記』の十月十五日の項には「今朝の新聞では空母二隻の撃沈と発表されていたが、今日午後三時のラジオ放送で、敵の空母七隻を轟撃沈したことが発表された。大戦果である。それで我本土周辺まで肉迫した敵も相当にひるんだにちがいない。……この程度に戦争が行なわれて行けば、敵の空母の損害は大いから、とても日本本土の近くをうかがうことが出来なくなるであろう。戦果は大きく転換しつつある」と記し、十八日の条では、その戦果を再修正している。

(13) 注9

(14) 注3

(15) 野田正彰「続 喪の途上にて」『世界』一九九四年十月。この野田の思いとしても、生存者四人がいた現実から航空機の構造に死没者の思いをきわめようとする。まさに航空機をめぐる現代の課題があるとするものである。

(16) 『方丈記私記』一九七一年七月。

(17) もと本学の教授、故松村博司が『アポの神霊—ミンダナオ島回想

記』(一九五五年七月私家版)に「本書はフィリピンミンダナオ島に戦った我々自身の思い出のため、祖国のために壮烈な戦死を遂げた幾多戦友の霊に捧げるため、さらには後にはにこされた遺族のために我々の行動の一部なりと伝えておきたい念願で拙い筆をとった」とまえがきし、末尾に各地の戦没者の名を列記している。

(18) ゆりはじめ『大岡昇平論』一九九二年九月。